

令和7年度東京都広報コンクール 総評 広報誌部門

金井委員

今回の広報コンクール（広報紙部門）には42作品の応募がありました。いずれの広報紙も伝えるための工夫が随所にみられ、幅広い世代に配慮した紙面づくりがされていました。特集記事については、対象を明確にしたうえで、テーマの選択、切り口、タイミングなどが深く考えられていたように感じます。そのなかでも、受賞作品の特集記事は丁寧な取材とともに、要素の構成と表現に工夫がありました。読者に意識をえてもらう、行動をえてもらう、という目的意識が伝わってくる紙面です。

今回、受賞した広報紙と選にもれた広報紙の評価の差は大きくはなく、どの自治体にあっても企画力、編集力とともに着実に向上していることが感じられます。目的意識をもって広報紙づくりに取り組まれている表れだと思います。日常業務に没頭していると、広報紙をつくることが目的となってしまい、本来の目的を見失ってしまうことがあります。記事を読んでくれた人の気持ちをどう動かすか、どのような行動に取り組んでもらいたいのか、着地点を意識しながら広報紙づくりに取り組んでいくことが大切だと思います。

田中委員

はじめて審査をさせていただく機会を頂きました。ひとりの住民として、馴染み深い広報紙もありました。ですが恥ずかしながら、広報紙をここまで細かく拝読したのは初めてでした。自治体広報に日々携われている皆さまには遠く及びませんが、「広報紙とは何か」と、私なりに考えながら一つ一つ拝見しました。

まず感銘を受けたのは、職員の方々の丁寧で真摯な仕事。独自のテーマを持ち、分かりやすく魅力的に伝える工夫を重ねておられて、どれも素晴らしい。でもこれはコンクール、審査をさせて頂ければならない。さて困った、どうしよう。その中で今回、私が大切にさせて頂いたのは2点。

1点目は、テーマをより強く響く方法で相手に届ける「伝え方のアイデア」。語る視点や語り手をスイッチすることではっとする気づきをくれたり、楽しく読める表現やぎゅっと密度高く骨太な記事など。作り手の意思と創意工夫を強く感じました。

2点目は、住民の方の「主体的な行動」を促し、行政と住民で共にまちをつくる「共創」の視点。住民の理解や行動を促したい、でも行政からの一方通行の発信は違う気がする。読んだ人が自発的に自らのまちに愛着を持ち、感情や行動を変化させるような広報紙。自然と動きたくなりそうだなあと感じるものに、私の心も動かされました。

行政は、個人にはない大きな力で多くの人を幸せにする仕組みや制度を整えてくれます。そして住民は、ともすれば”サービスを受ける側”だと感じがちです。でも住民一人ひとりが主体となって生み出す小さな行動の集まりが、しなやかで強いまちの未来をつながっていくということを、改めて学ばせていただきました。

割れたものを捨てるときはメモ書きを貼る。道路のくぼみや街頭の不点灯をLINEやアプリでレポートする。聴覚障害がある方もそれぞれで、手話・読話・筆談などどんな方法がいいか聞くといい。

自分ができる、小さなことでいいんだと思いました。小さな積み重ねが自分や家族が暮らすまちを住みやすくしていくし、そのためのサポートを広報紙はたゆまず続けてくださっているんだと感じました。

広報紙に関わるすべてのまちの皆さま・職員の皆さまに感謝申し上げます。